



旭 岳 麟

岳麟は、寛政十一年（一七九九年）盛里村で父四郎左衛門の長男として生まれた。本名は不明であるが雅号を「旭岳麟」又は「旭羅山」「明哲」と称した。

性来画を好み、十代にして僧雪室の弟子、画僧波羅密に

弟子入りし、画の道に専念した。

岳麟は二十歳頃、江戸へ出て紀州候のお抱え絵師となり、鷹の絵を得意とし、絵はすべて筆止めとなっており、紀州候以外には描かなかったという。

明治維新により紀州候が和歌山の領地へ引き揚げたため岳麟は故郷の盛里に帰り、寺院などの依頼に応じて多くの絵を残している。

下町の八朝祭の屋台の中幕「三番叟」のほか、主として人物画が多く、岳麟独自の画風をつくりだしている。本光寺の掛軸を始め、七十八歳のとき描いた西願寺の襖絵、正蓮寺の襖絵と掛軸は岳麟最後の力作である。

明治十一年神官の依頼により小野若宮神社において絵を描いている時に倒れ、盛里の実家に引きとられ、七十九歳の長寿を得て没した。

郷土の画家

10月・11月のカレンダー

藤井霞郷

明治三十一年東京芝区高輪町で、父八十松、母志満の長男として生まれ徳太郎と名付けられた。母は禾生村に生まれて二歳の時、父親の妹の養女となり品川で育てられた。

霞郷は、小学校の頃から図画と習字が上手な生徒として、その作品はいつも学年を代表

して展示され、将来は美術家になるつもりで勉強した。

大正十一年二十四歳のとき第六回下町会展覧会に「互焼く家」を出品して以来一作毎にその進境を示し、数多同門の士の視線の集まることとなり、大正十三年二十六歳のとき、第五回帝国美術院展覧会に甲州の山村の情趣を描いた「冬の日」が初入選し、本会の画家として認められる機会を得たのであった。

つづいて大正十四年第六回帝展に出品した「鼓の音」は特選候補として入選し以後毎年帝展に出品して数回特選候補となり注目を集めた。

昭和八年病氣静養のため妻の実家である禾生村小形山に転居した。昭和二十二年六月文部省次官名にて、日展審査委員候補の推せんがあった。画人としての名譽であり喜んで就任はしたが、第三回日展が上野の森に開催されたときは身は病床にあり、全快する日を待つのにてついに断念せざるを得なかった。

昭和二十四年にこれまでの精進的苦痛と病状が悪化し、惜しまれて五十一歳で早逝した。

米は 全量集荷業者を通じ 売渡しましょう



昭和六十一年産米の作柄もほぼきまり収穫の秋を迎えます。生産者の皆さん、米は食糧管理法によって国で指定した集荷指定業者を通じて販売する以外には米の生産者でも自由に売ることが出来ません。各市町村長から指示された政府売渡し限度数量は、できるだけ早く最寄りの集荷指定業者（農協等）を通じて販売して下さい。

米の生産者は、自家保有米（自家で食べるもの、種子、贈与するもの）以外は全量売渡すようにしましょう。

※売渡す手続等不明の点は、市役所農林課、農協等集荷指定業者又は当支所にお尋ね下さい。

農林水産省山梨食糧事務所
都留支所
☎(43) 1441